

関東向け帰り便を活用して、農業機械輸送をモーダルシフト

ヤンマー物流サービス(株)は、ディーゼルエンジン、農業機械、小形船舶、建設機械などを製造、販売しているヤンマー(株)とグループ事業会社から、倉庫保管・流通加工・輸送などの物流業務を受託しています。

2009年、ヤンマーと旧ヤンマー農機(株)の合併により荷扱量が3,000万トンキロを超え、改正省エネ法の特定荷主に指定されたため、物流面のCO₂排出量削減等の環境対策が大きな課題となりました。ヤンマー物流サービスは効果的な環境対策を模索していたところ、農業機械輸送を業務委託している日本梱包運輸倉庫(株)から既存の31ftコンテナを利用した鉄道輸送の提案を受けました。日本梱包運輸倉庫では、独自に開発した31ftコンテナを関東～九州間の区域貨物輸送に活用していますが、これまで空回送していた帰り便を有効活用するための荷物を探していました。

そこでヤンマー物流サービスでは、中国地方の物流拠点である中国製品センター(岡山市東区)から関東製品流通センター(茨城県筑西市)までトラック輸送していた農業機械を、31ftコンテナに積載して鉄道輸送することを検討しました。西岡山駅から越谷(タ)まで鉄道輸送し配達した場合の時間、コスト、輸送品質を検証するため、利用運送事業者の日本フレートライナー(株)、岡山通運(株)とJR貨物が協力して試験輸送に取り組みました。

大型トラックとほぼ同等量が積載できる31ftコンテナですが、全く同じ積み方はできなかったので、トラックとは組み合わせを変えて、積載する製品を限定することで輸送量と輸送品質の問題を解決しました。他方、トラックでは30時間かかった輸送時間は20時間に短縮され、夜間に定時輸送されるので時間が有効に使えることも分かりました。

製品統括部国内物流グループの堀圭大さんは「検証の結果もよくコスト面の条件も整ったので、環境対策に効果の高い鉄道輸送にシフトすることにしました」と話しました。

2010年10月、ヤンマー物流サービスでは農業機械輸送のモーダルシフトを本格的に開始し、年間162個を輸送しCO₂排出量を7分の1に削減できました。2012年度の目標は月平均15個としています。

「異業種間の往復輸送ではなく、業務委託をしている事業者との共通運用化ですから大きな問題もなく進められました。また、既存のコンテナを有効活用できたことで初期費用をかけずに環境負荷低減に高い効果を出すことができました」と成果を

話しました。

同輸送は、中国グリーン物流パートナーシップ会議の「2011年モーダルシフト優良荷主表彰」の受賞につながりました。

堀さんは「今後、さらに農業機械以外の製品でも鉄道輸送を拡大したいと考えています。環境対策はこれからも継続して取り組む

課題ですので、これまで以上にJR貨物、日本梱包運輸倉庫、利用運送事業者の皆様にご協力をお願いしたいと思います」と述べました。



堀さん



荷揃えされた農業機械



中国製品センターの倉庫

西岡山駅で堀さん(左)と白木支店長

福岡(タ)から西岡山駅に空回送されたコンテナを積載してヤンマー物流サービスの中国製品センターへ集荷に向かう



日本梱包運輸倉庫の31ftコンテナに農業機械を積み込む

3台の機械を積み込んで西岡山駅から越谷(タ)へ



今回積み込んだ機械はコンバイン3台です。中国製品センターの倉庫の前には、スロープが2基設置され、出荷を待つ真新しい農業機械が並んでいました。スロープとコンテナ妻側入り口がつながり、担当者の運転でコンバインがコンテナ内部に進んでいきます。コンテナの両壁と機械の間は、養生する作業者がぎりぎり入れるほどの隙間しかありません。1台毎、ラッシングベルトで固定し、最後の機械を積み終えると3台がぴったり収まりました。積み込みをしている間に、岡山工場からトラックで製品が到着しまし

た。スロープが設置され、取り卸しが始まりました。農業機械の出荷は、農作業の工程に沿って繁忙期が訪れます。春にはトラクタや田植機などが、秋にはコンバインなどの収穫機の出荷が旺盛になり、作物が生長する夏には一時出荷を控えます。「今年度はトラクタ、田植機、コンバインといった主要機種の出荷が共に好調でコンテナ利用の目標である、月平均15個は達成できる見込みです」と堀さんは話しました。



スロープを自走するコンバイン



1台ずつラッシングベルトで固定する 3台目を積み込む



トラックで製品が着いた



西岡山駅に向かう



駅でコンテナを取り卸す

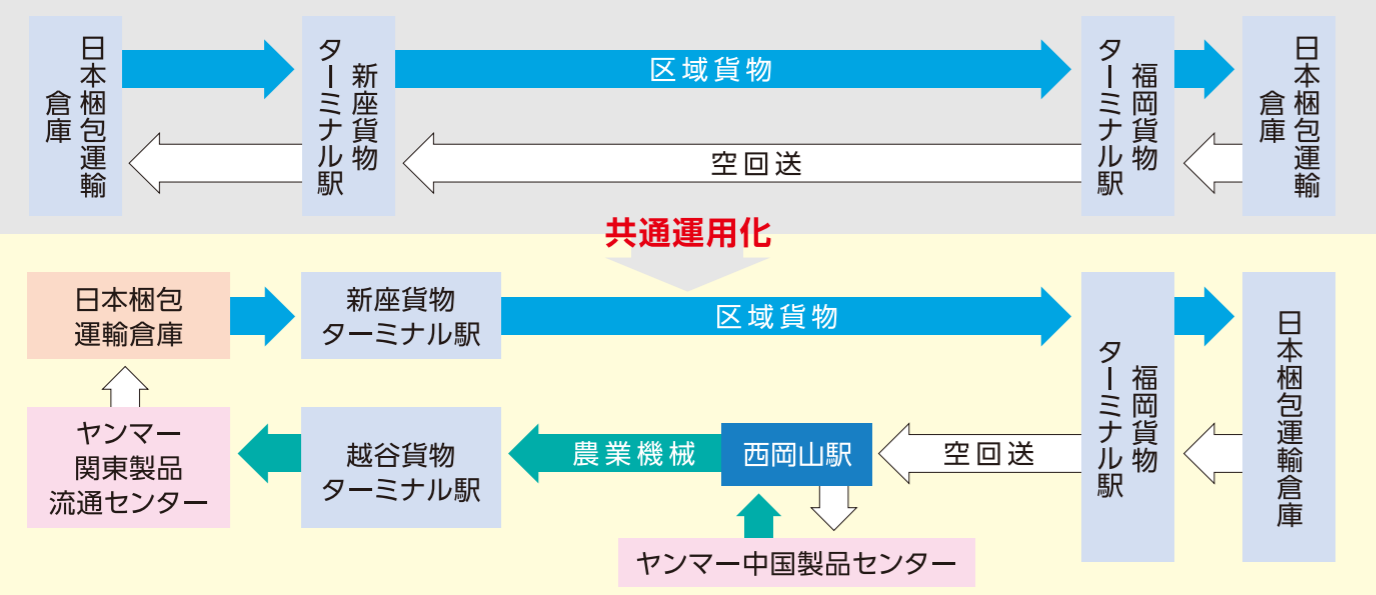


コンテナ内部

JR貨物岡山支店 大型私有コンテナ共通運用化の取組み

column

大型私有コンテナの共通運用化によるモーダルシフト(ヤンマー物流サービス/日本梱包運輸倉庫)



白木支店長

JR貨物岡山支店の白木禎支店長は「今回のヤンマー物流サービス様と日本梱包運輸倉庫様の共通運用化は、利用運送事業者の日本フレートライナー様を絡めて両社の情報をいち早く受け止め、集荷はトレーラー車を保有する岡山通運様に依頼するという協力体制で取り組んだ結果、本格輸送へと進みました」と話し、次のように説明しました。

「大型私有コンテナ導入による輸送は、コンテナ新造コストの負担や復荷の確保が容易でないことによる回送ロス発生などの問題があり、実現までのハードルが高いのですが、今回は既存案件の空回送を活用することで、いわゆる『三角運用』による『コンテナの共通運用化』で迅速に対応することができました。

岡山支店では、近年こうした『三角運用』による『私有コンテナの共通運用化』の提案により、新規案件が実現した事例がいくつかあります。この方式では新規顧客はイニシャルコストの負担がなくなり、既存顧客はコンテナ回送ロスが解消できる、といったメリットがあり、かつ関係当事者間で合意すれば実現までスピーディーな対応が可能のため、お客様にも好評です。

効果的な提案のためには、営業マンが様々な荷物やコンテナの動きについての情報を日頃からよく掴んでおくことが大切で、そうした情報はお客様の元へ足を運ぶことで得ることが多いです。

『モーダルシフト優良荷主表彰』の受賞は他への影響力があり「うちでは鉄道輸送はできない、と言っていたお客様に“うちでもやればできるかもしれない…”と期待感を持っていただけたいです。これを次のモーダルシフトにつなげられるよう努めたいと思います」と話しました。